平成11年9月5日発行（年4回3・6・9・12月5日発行）通巻51号

Caring for Young Refugees

子どもたちの明日

Children, Our Future

CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

カンボジア・プレイタトウ保育所　©小林正典
Prey Ta Toch Childcare Center, Cambodia
© Masanori KOBAYASHI

1999年9月 No. 51 目次

エッセイ
ＣＹＲ特別座談会を聞いて
「親も育てる地域ぐるみの保育を」
矢島常子
「ＣＹＲにかかわり、自分の生活を見直す」
青野ちえみ

レポート
保育所のないタイ国境の村
―ＤＥＣによる調査から―

インタビュー
チャリティーコンサートを実現させた若者たち

エッセイ
子どもたちの育つ権利を考える
佐藤幸江

情報
染めの技術をカンボジアで生かす
カンポイ・トングナム

2 Essay
CYR Symposium "Peace-loving Mind in Children's Life"
"Bringing Up Children by the Community"
Tsuneko YAJIMA
"Finding Answers by Being Involved With CYR"
Chiemi AONO

6 Report
Thai Boarder Villages Without Childcare Centers
—DEC Survey Conducted—

8 Interview
Youths Who Made Charity Concert A Success

10 Essay
On The Right of the Child to Develop
Yukie SATO

12 Information
Bringing Back Dyeing Skills to Cambodia
Khampoy TONGNAM

カンボジアの保育所で ©小林正典
At a childcare center in Cambodia © M. KOBAYASHI

CYR特別座談会を聞いて
「平和をつくりだす心を子どもの生活のなかに」

六月二十七日、CYR特別座談会が東京・新宿区の真生会館で開催されました。日本、タイ、カンボジアの子どもたちのおかれている状況が報告され、保育を通した平和への道について話し合われました。（座談会の記録はCYR東京事務局にあります）

親も育てる地域ぐるみの保育を

矢島常子　保育士

先日、幼い難民を考える会の座談会に出席し、その活動報告や日本における子どもの現状などについて、お話をうかがいました。タイでの活動報告の中で、保育者に甘える子どもの様子がありましたが、大人に求めるものはどこの国の子どもも同じなのだと思い、心の安らぎを感じました。

ところで、多くの点で恵まれているはずの日本の子どもたちの現状はどうでしょうか。「心の豊かさ」あるいは「育ち方」という点で、私は疑問を感じています。それは子育てに責任がもてない親、心に余裕のない親が多いことです。その結果、子どもたちは非常に悲惨な体験や辛い思いをして生活しています。それは幼い子どもたちが抱えるにはあまりにも大きな問題です。したがって、保育という仕事の中に「親も育てる」ということが、大きな課題となってきます。経験の浅い保育者にとっては極めて難しい課題といえるでしょう。例えば、具合の悪い子を保育園に預けて、夫婦揃って遊びに行ってしまったり、「我が家は朝食をとる習慣がないので、子どもも食べなくても平気です」あるいは、「私、子どもを抱くことが嫌いなんですけど、うちの子は甘えて、だっこ、だっことうるさいんです。どうしたらいいんでしょうか」などという母親が少なくありません。私たちは子どもの育つ環境を少しでも良くしていきたいと、そういう母親たちの相談にのったり、アドバイスをしたりしたいのですが、近頃はそれが難しいのです。保育者として、力量のないことを痛感せざるを得ません。

カンボジアで活動している野村美知子さんの報告の中に、保育園を卒園した少年が、時々保育園の給食を食べに来ることがあるというお話がありました。少年は給食を食べた後、手伝いをしたり、小さな子どもたちと遊んで帰っていくということでした。これからの日本の保育園は課題が山積みです。その中の一つに、「地域に根ざした保育園づくり」ということがあります。彼女の報告を聞いて、私は「これだ！」と思いました。もちろん、私はその少年に会っているわけではありませんが、その子の笑顔、生き生きとした姿が想像できるようでした。私の心をとても豊かにしてくれるお話でした。カンボジアでは地域ぐるみで子育てをしていて、保育園はその拠点になっているのではないかと感じたのです。

この度、この座談会を聞いて、改めて私自身の仕事を見直す機会が得られたようです。これからも保育という仕事を通して、日本だけでなく世界の子どもたちに目を向けていきたいと思います。

CYR Symposium

"Peace-loving Mind in Children's Life"

CYR Special Symposium was held on June 27 at Shinsei Kaikan in Shinjuku, Tokyo. Situations of the children in Japan, Thailand, and Cambodia were reported and the way to peace through childcare discussed.

Educating Parents and Bringing Up Children by the Entire Community

Tsuneko YAJIMA, Childcare Worker

I heard about CYR's activities and current situation of Japanese children at a symposium held by CYR. There was an episode about a Thai child trying to attract attention of childcare workers, and I felt kind of relieved to learn that children look for the same kind of things from adults in every country.

Meanwhile, I was asked a question about Japanese children who are supposed to be privileged in many ways. I could not help but doubt if they are indeed privileged in respect of generosity of the mind or the way they grow up. There are so many parents who cannot take responsibility for raising children and who lack generosity toward others. As a result, some children spend their life in extreme misery and bitterness. This is too big a problem for small children. Thus, childcare is faced with a difficult task of "also educating parents". This must be an extremely difficult task for a childcare worker with limited experience. For example, a couple may leave their sick child at a childcare center to go out and have fun. A parent may nonchalantly say that "we don't have the habit of eating breakfast, and it's OK for our kid to skip breakfast", or "I hate holding a child in my arms, and yet my child persistently wants me to cuddle her. What am I to do?" We would try to help such a mother and offer advice, but it is getting more and more difficult. I feel my limited capacity as a childcare worker in such cases.

Ms. Michiko NOMURA reported about activities in Cambodia and told about an older boy who occasionally comes back to the center, has lunch with other children, helps to clean up and plays with small children. One of the many challenges facing childcare centers in Japan is "to create a community based childcare center". This story about the boy flashed into my mind as a possible answer to these challenges. Even though I have not met him, I could imagine how he smiles and how lively he is and I felt so happy for children in Cambodia as they are being brought up by people of the community, with the childcare centers taking a central role for it.

I feel that I was given an opportunity to review my own work as a childcare worker. I wish to keep my eyes not only on Japanese children but also on the children worldwide.

CYRにかかわり、自分の生活を見直す

青野ちえみ　自立生活センター職員

座談会では、タイ・カンボジア・日本の子どもたちの様子について、それぞれの保育現場での実例があげられ、とてもわかりやすく聞くことができました。私はCYRが活動しているタイやカンボジアの農村を以前に訪ねたことがありますが、今回の報告を聞いて、地域の人たちの保育に対する関心が少しずつ高まっているように感じました。その一方、村では貨幣社会の与える影響がますます大きくなり、新しい問題を引き起こしていることを知りました。また日本では、小さな子どもたちが「頭の回転がとても早い反面、セルフコントロールが苦手」と、かなりアンバランスになっているそうです。どちらも社会の流れの変化に、大人たちがなかなかついていけないことで、子どもたちを危険にさらしているという印象を受けました。

今回の座談会で特に印象に残ったことは、障害を持つ子どもについてのお話です。タイで、小学校入学を拒否されたダウン症の子どもが保育園に来て、小さい子どもたちの世話をしている様子が、また日本では、障害児施設と交流のある保育園の様子が報告されました。障害を持つ子どもを取り巻く環境や問題はそれぞれの国で違いますが、共通する部分もまた多いようです。障害を持つ子どもにも、持たない子どもにも、自然にお互いを受け入れる力や一緒に育っていく力がそなわっていることや、まわりの大人たちは、そうした力を育む環境を整える配慮が大切だと改めて感じました。

私は今「重い障害があっても地域で暮らしたい」という思いが生んだ、障害当事者の手で運営されているグループ（スタジオI生活支援ネットワーク）で働いています。日本ではまだまだ「障害者は保護される存在」という考えが強く、周りの人たちが必要以上に干渉し、その結果、自由や主体性を奪ってしまいがちです。「スタジオI」では、地域での自立生活に必要なことを自分たちで考え、介助者派遣やカウンセリングなどの支援を、障害者自身が中心となって行っています。私はここで働きながら、自分の役割について悩んだり迷ったりすることも多いのですが、CYRの活動にかかわることで、沢山のヒントを得て励まされています。

常に相手の視点に立ち、ひとりひとりを大切に考えようとするCYRの姿勢や、今回のように、いろいろな立場の人の声を聞きながら試行錯誤する作業は、人とかかわる仕事をする上でとても大切だと思います。今回の座談会の会場には、男性もたくさん聞きに来ていて発言をしていました。CYRはこれからも広い視野に立って、いろいろな立場の人たちの話を聞く機会を作って欲しいと思います。

CYR交流キャンプに参加した青野さん
Ms. Aono at CYR exchange camp

Finding Answers and Ideas by Being Involved With CYR

Chiemi AONO, Coordinator, Studio I

Discussion of childcare centers in Thailand, Cambodia and Japan taught us how children were in these areas. Since my visit to Thai and Cambodian villages served by CYR, people seem to have deepened their interests in childcare and are now exposed to stronger influences and many problems of monetary economy. Japanese children, I understand, are losing their balance with life with their "quick mind and poor self control". In both cases, grown-ups seem to find it hard to catch up with the changing trends in the society and to be lending children to further risks.

I was very much impressed by the discussion of handicapped children. We were told about how a Thai child with Down Syndrome who was denied admission to the elementary school was attending a childcare center and looking after small children, and how children at a childcare center in Japan were enjoying exchange with those of an institution for the handicapped. While the environment and problems faced by handicapped children differ from country to country, there are many issues that are common to all. Children with or without handicap are both endowed with ability to accept each other and to develop together, and grown-ups should pay particular care to create an environment for fostering such abilities.

I am working for a group called Studio I Life Support Network. The group was created and being managed by people with handicaps who wish to share living with people of the community. The thinking that the handicapped people should be protected still prevails in Japan and people tend to interfere and deprive them of freedom and autonomy. At Studio I, handicapped people take the initiative to decide what is needed for self support in the community and to support the members by dispatching carers and counseling. While I work there, I often wonder and worry about my role within the organization, and I find answers and ideas for solving problems as I involve myself in CYR's activities.

I believe CYR's posture of always looking at things from the perspective of others and respecting individuals by, for example, holding a symposium such as this to listen to different voices and opinions is essential for carrying out works which involve people. There were many men who attended the symposium and who voiced their opinions. I wish that CYR will continue its good work and offer opportunities to learn opinions of people from various venues.

タイの保育所で
At a childcare center in Thailand

保育所のない タイ国境の村

―DECによる調査から―

プーナムキアン村の保護者たちに話を聞く
Interviewing parents in Phoonamkliang Village

カンボジアとの国境に近いアランヤプラテート郡には、大小百以上の村が散らばっています。国境に近いために、地域は警備に当たる軍の管轄におかれ、カンボジア難民の流出により、いくつもの村が消えたり、併合されました。

アランヤプラテートに拠点をもつDEC（CYRのタイ事業実施部門）は、難民が引き上げて以来、郡内のいくつもの村で保育者の研修や、教具の作り方、貧しい村で補助栄養食の指導をしてきました。また、保育所や学校のない村で、子どもを対象に週末巡回レクリエーション活動も続けてきました。

今年四月、DECはこれまでの仕事を見直した機会に、家庭の事情でケアが十分でない子どもたちや、保育所についての考えを知るため、保育所のない村で聞き取り調査を行いました。調査の対象は三村の保護者各二、三十人と行政関係者を含めました。

クドヒン村（クローンナムサイ地区、戸数一八三、主に米作農家）

・子どもの数

一家族平均四人。村全体で〇―五歳児は六十一人、出生数は年間二十人。計画出産。

・育児について

心配なのは、子どもが病気になること、成長が遅れていないかということ。父親はあまり育児には参加しない。母親にとって、働きに行きたくても代わりに子どもを見てくれる人がいないことが問題。

・保育所について

母親の多くが設置を望んでいるのは、農繁期、休耕期ともに働きに出ても不安でないから。「保育所ができれば、母親同士協力したい」と母親たちは言い、村長の協力を望んでいる。子どもの受け入れは二歳からがよいと考える。村全体では三十人くらいになる。負担できる保育料は月三十バーツ（九十円）程度。昼食を持ち回りで協力する方法もある。村で協力して建てたい。

プーナムキアン村（パライ地区、戸数四〇九、主に畑作農家）

・子どもの数

一家族平均三人。村全体で〇―五歳児は約百五十人。両親が外に働きに出て親戚に預けられている子は十五人程度。

・生活環境

この村では軍が土地を管理している。土地の耕作は無料で認められている。二十年の間に移住者によってできた集合村。新参のため軍の土地利用ができない家族が約20％あり、雇われ農家として生計を立てる。

・育児について

知識はテレビ、友人から得ているが、病気、川に落ちるなど事故が心配。母親たちは「自己流の子育てに自信がない。離乳食の栄養面などがよく分からない」と話す。母親は、子どもが一歳までは家で育児に専念し、その後は祖母や親戚に預けて働きに出る。

・保育所について

DECが運営に協力したパライ村の保育所を知る親は保育所を評価し、設置に積極的。保健所のボランティアは、保育所について「子どもの保健管理がしやすくなる。村の力で保育所を完成に導くことが先決で、その後に他団体に支援を依頼するべき」。

ハンサーイ村（ハンサーイ地区、戸数五三五、主に米作農家）

・子どもの数

一家族平均二人。村全体で〇―五歳児は一四四人。生活への負担を考えて出産制限をしている。

・育児について

家庭での出産が多く、家に伝わる伝統的な育て方で、離乳食の時期、内容などは人によって違う。母親の心配の大半は外での事故、食事の量、よその子どもとの成長の差。病気のときは村の保健所や郡病院を利用する。育児に関する情報、ことに病気の予防、離乳食などについて知りたい。

・保育所について

年配者は保育所によい印象をもっていない。母親たちは、「保育所があれば、子どもの生活が規則正しくなり、自分のこともできるようになる。」「母親にあまり依存しなくなって欲しい」と話している。負担保育料は月百バーツ（三百円）が適当。

Thai Border Villages Without Childcare Centers

—DEC Survey Conducted —

In Aranyaprathet near the Cambodian border, there are more than 100 villages, both small and large. Because of their proximity to the border, the military controls the area. Many villages appeared and then disappeared as Cambodian refugees' flowed in and out.

DEC, CYR's Thai Division, has served villages in the area by training childcare workers, teaching them how to make toys, and giving nutrition guidance. In villages without childcare centers or schools, DEC has offered weekend recreation activities for children.

DEC conducted an interview survey in three villages without childcare centers last April, in order to learn about what people thought about children with inadequate care and childcare centers. The subjects were administrative staffs and 20 to 30 parents and guardians from each village.

Kudhin Village

(Klongnamsai District. Most of 183 households are engaged in rice cultivation)

Number of children: There are an average of four children per family. The total number of children aged 0 to 5 is 61. The annual birth is controlled to be about 20.

On raising children: People are concerned about children becoming ill and their growth being retarded. Fathers do not take active roles in rearing children. The problem with mothers is that there is no one to look after children if they went out to work.

On childcare center: Many mothers want a childcare center because they would feel secure when they go to work during the busy or the slack farming seasons. They would "help together the childcare center if they had one" and would like the village head to assist. They think that children should be at least two to attend the center. There would be about 30 children in all. They can pay about 30 bahts (¥90). They might help by taking turns in preparing lunch. The villagers would like to help each other for building of the center.

Phoonamkiang Village

(Parai District. Most of 409 households are engaged in vegetable cultivation)

Number of children: One family has an average of three children and there are about 150 children aged 0 to 5 in the village. About 15 are being cared for by relatives as their parents both work.

Living environment: The military controls the land but allows villagers to cultivate for free of charge. The village came into existence as immigrants came during the past 20 years. New arrivals, about 20 % of the villagers, are not allowed to use the land and must make living by working for others.

On raising children: Mothers acquire knowledge from TV and friends, and are concerned about sicknesses and accidents. They say that they are not confident of their ways of raising children and do not have knowledge about nutrition. Mothers look after children at home until they reach one, and then go out to work by asking grandmothers and relatives to look after children.

On childcare center: Parents who know about the childcare center in Parai Village that DEC had supported are aware of the merits of a center and would like to have one in the village. A health volunteer says, "children's health control would become easier. The village must take the initiative to build a childcare center, and then ask the outside group for assistance".

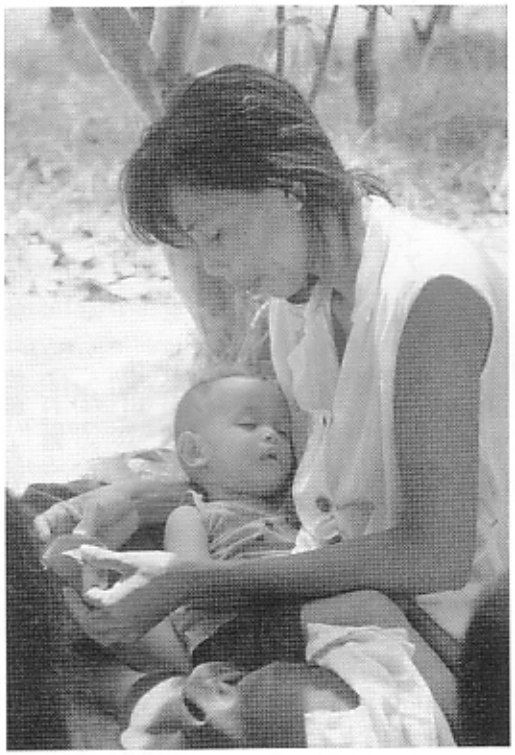
Hansai Village

(Hansai District. Most of 535 households are engaged in rice cultivation)

Number of children: A family has an average of two children and there are 144 children aged 0 to 5 in the village. The childbirth is controlled because of the burden on life.

On raising children: Many mothers give birth at home and raise children in traditional ways. Time and diet for weaning differ from family to family. Mothers are usually concerned about accidents outside the home, the amount of food children eat, and the difference in development compared to other children. When a child becomes sick, they go to the village health center or the county hospital. They would like to know more about rearing of children, preventing illnesses and weaning diets.

On childcare center: Elderly people do not have good impressions about childcare centers, but mothers say that "if we had a childcare center, children would lead more orderly life and would be able to look after themselves." They can afford 100 bahts (¥300) a month for childcare.



保育所のない村で
At a village without childcare center

チャリティーコンサートを実現させた若者たち

七月十七日、東京都目黒区公会堂で、民族舞踊や音楽などのコンサート「カンボジアの天使の夢」が開かれました。企画したのは、日本外国語専門学校（東京都新宿区）国際ボランティア学科などの学生たち。彼らの苦労話をお聞きください。

コンサートが終わって、今の気持ちは？

長谷川　いろいろあったけど、成功に終わってよかったです。

中田　身近にできることから始めようというのが伝わったし、学生が一体になれた。

佐藤　毎日集まってやっていたのが終わってさびしい感じ。大成功で、みんな喜んでくれたし、分かってくれてよかったです。

チケットはどうやって売ったんですか？

中田　二年生は学校の友だち、一年生はバイト先や高校の友だちにも売りました。

沢田　近所の中学に行ったんだけど、ＰＴＡを通さなきゃいけないとか、代表者を連れてこいとか言われて、だめでした。

山口　私はホームルームの時間にカンボジアの話をさせてもらいました。みんなも理解してくれて、ほとんど全員がチケットを買ってくれました。会場近くでは、四、五回に分けてチラシを約一万枚、ポスティングをしました。地図を見てスタッフ四十八人で手分けして。

うれしかったことは？

長田　印刷屋さんにプログラムの印刷を割引料金で頼んで、取りに行ったら「お金はいいよ、持って帰りなさい」と言われて、もう、うれしかったです。印刷屋さんも照れてたみたいで、すぐ帰されちゃったんですけど。

中田　学校の近くのお弁当屋さんは、弁当を半額にしてくれました。近所に本社がある会社は、一月に協賛のお願いに行ったときは検討するといわれて返事がなかったんですが、コンサート直前に連絡があって、自社製品を寄付してくれました。これは出演者への謝礼に使わせてもらいました。

理解を得られなかったことは？

中田　企画書を作って、十一ヵ所に協賛のお願いに回ったけど、ほとんどが門前払い。

長谷川　理解する前に、興味がないと門前払いする人が多かったです。学校の友だちでも、「興味ないから」と話を聞いてくれない人もいました。

理解されたと感じたことは？

長田　当日、道案内で立っていたら、通りがかりの人が、何やってるのと聞いてくれて、お財布がないので持ってくるわと戻って、コンサートに来てくれました。

山口　チラシや新聞の切り抜きを持って来てくれた人もいてうれしかった。あと、カンボジアの状況のプレゼ（発表）をした後、休憩の時に声をかけてくれた人がいたこと。コンサートのために、スタディーツアーを組んで、カンボジアに行きましたね。

長谷川　実際は厳しい状況があるんだと思いますが、期間が短かったので、子どもたちの元気なようすとか、いいところしか見てこられなかった。

佐藤　たまたまテレビでエスニック・ミュージックセンター（ＥＭＳ）を知って、電話で出演を頼んだら、ボランティアでいいと即答してくれました。スタディーツアーに行く話をしたら、楽器を買ってきてほしいと頼まれました。カンボジアでも演奏できる人は一人しかいないという珍しい楽器でしたが、ＣＹＲのスタッフの紹介で注文し、五月のスタディーツアーの時に持ち帰りました。大きくて（160cm）壊れやすいので、機内では空席を探して移動したり、落ちついて食事もできませんでした。でも、演奏した若林さんは、二十年前からカンボジアの楽器が欲しかったそうで、舞台でも楽器の話をしてくれて、本当にうれしかったです。

コンサートの評判はどうでした？

中田　アンケートだと、一番人気は児童合唱団。二番はヒップホップ・ダンス。これは実行委員の岩堀くんが友だち二人と踊りました。

長田　おばちゃんたちは、あっけにとられてました。なに、これ？って感じ。でも母はあれが一番よかったと言ってました。「いまどきの若者」がこのコンサートをしているという象徴だったと思います。

佐藤　あの息切れと、あいさつがよかったよね。踊るだけで退場されたら、あれはなんだったんだ、で終わりだったから。

中田　評価という点ではアンケートしか材料がなくて、ちょっと不十分でしょうが、「できることから始めたい」ということも書かれていたし、僕らの思いは伝わったと思います。

インタビュー
長谷川千鶴さん、中田修三さん、佐藤直樹さん、沢田剛守さん、山口綾子さん、長田幸子さん（七月二十九日　日本外国語専門学校　学生ラウンジにて）

コンサートチケット1,050枚の売上と募金の計1,132,000円は、カンボジアの子どもたちのために、実行委員会からＣＹＲに寄付されました。

Youths Who Made Charity Concert A Success

On July 17, students from International Volunteer Course of Japan College of Foreign Languages (Shinjuku, Tokyo) presented a concert of ethnic dances and music entitled "Cambodian Angels' Dream" at Meguro Public Hall in Tokyo. Students discuss joys and hardships of their venture.

What are your feelings now that the concert is over?

Hasegawa: In spite of everything, it was a huge success, and I am pleased.

Nakata: I think that we successfully conveyed the message "Start with everyday things", and we all became united in carrying out the project.

How did you sell your tickets?

Nakata: Sophomores sold to their classmates, and freshmen to their high school friends and colleagues at their part-time job places.

Sawada: I visited a nearby junior high school and was told that we had to go through PTA, had to bring our representative, so on, but it didn't go through.

Yamaguchi: I gave a talk about Cambodia during homeroom class. Everybody showed understanding and most bought tickets. Four or five times, we posted a total of 10,000 posters in the neighborhood of the Hall by studying the map.

What were the things you were pleased with?

Osada: We asked the printer to give us discount for printing the concert programs. When we went to pick them up, the printer said, "We don't want any money. Just take them along." I was ever so glad.

Nakata: In January, we went to a big company to ask for donation. They said they would think it over, and they didn't contact us until immediately before the concert. They gave us their merchandise, which we presented to performers as gratuities.

Osada: I was standing on the street to guide people to the Hall. A person passing by asked me what I was doing, and went back to fetch money and came to the concert.

What things did you find difficult in gaining understanding?

Hasegawa: Many people rejected our approach saying that they were not interested. They would not even try. Even friends from school refused to listen because they were not interested.

You organized a study tour and visited Cambodia before the concert.

Hasegawa: I suppose the reality must be very harsh, but we saw only the nice things and happy children, maybe because of the little time we had.

Sato: When I told about our study tour, I was asked to bring back a musical instrument for the performance of the concert. It was a rare instrument and even in Cambodia, there is just one person who can play it. CYK helped us to order in advance and we did bring it back. It was big (160 cm) and fragile; we had to go from one seat to another on the plane and couldn't eat our meals properly. But Mr. Wakabayashi, who played it, was very much pleased because he had wanted it for more than 20 years. He discussed the instrument at the concert. I was so happy for him.

カンボジアの楽器が演奏された。
Artists playing Cambodian instruments

How was the concert received?

Nakata: According to the questionnaire survey, Children's Choir was the most popular, followed by Hip-hop dance. Iwahori, an executive committee member, danced with his friend.

Osada: Elderly ladies were astonished. But my mother thought that was the best. I think it kind of symbolized concerts planned and given by youths.

Nakata: Although the only tangible result was the questionnaire, I think our message "I will start with what I can" reached people.

The executive committee gave the sum of ¥1,132,000 from the sale of 1,050 tickets and donations at the concert to CYR to be used for children in Cambodia.

子どもたちの育つ権利を考える

佐藤 幸江　ＣＹＲ理事

緑に囲まれた保育所の庭です。子どもたちは、保母さんが手にした葉っぱと自分たちが取ってきた地面の葉っぱとを見くらべています。足元の葉はほとんどが見本と同種です。「この葉の形とおなじ?」保母さんが、並んだ葉の一枚を指して聞きました。歓声のような「おなじ!おなじ!」という返事のなかに、「ちがう!」という声があります。「どこがちがう?」「虫食いのとこ!」。「これは何の葉?」「ふつうの葉」。これは数年前、カンボジアの村の実習指導で、形の認識力、頭に思い浮かべる場所や方向、左右差などの識別を取り上げたときの情景です。

内戦や内乱の記憶が新しいカンボジアは、世界で最も貧しい国のひとつです。農村地帯に暮らす就学年令に近い子どもたちは、大半が家に食べ物もない貧しい家庭に生まれています。それでいて、アジアで同じように貧しく、外国からの教育援助を二倍も長く受けてきたバングラデシュ、パキスタン、ネパールの就学率にくらべると、カンボジアの就学率は他をしのいでいます。これは教育を否定された苦い歴史を清算しようと、努力してきた関係者のおかげです。しかし、問題はたくさんあります。まず農村地帯に際だつ低い就学率と、年間25％が留年し、一年から三年までの子ども約30％が退学する（政府統計一九九七―九八）初等教育の実態です。国や家庭の教育費の無駄もさることながら、一番の犠牲を強いられるのは教育の権利を失う子どもたちです。背景には子どもが収入を助ける貧しい家庭の事情があります。また、学校の数が少ないために、幼い子が数キロも歩く通学を親が望まないという理由もあります。

政府はいま、外国や国際機関、ＮＧＯの協力を頼りに地域開発をすすめ、経済活動を活発にしながら、経済や社会基盤を長期的に安定させようとしています。貧しさが原因で社会的差別は広がるばかりです。働き手を労働力として都市に取られる農村には、生活力のない女性や子どもたちが残され、その生活は不安で悲惨です。食べ物だけでなく、清潔な飲み水も少ない村では、慢性的な栄養障害にともなう病気が絶えません。それでいて公的な医療サービスもないのです。五歳以下の乳幼児死亡率の推定は千件の誕生のうち九〇―一一五件で、アジア地域平均の四二件をはるかに上回ります。

政府は国の復興開発計画のなかでも、保健政策・教育の普及には力をいれて、施設づくりや人材育成を柱としています。なかでも幼児期「ケアの重要性」を強調するのは教育・青年・スポーツ省です。今年初め特別チームをつくり、関連ＮＧＯの諮問を求め、小学校に五歳児を通わせるだけでは解決しない、貧しい地域の子どもたちの発達環境を改善しようとしています。また、女性・退役軍人省も、緊急の課題として、今年三月に発表した五ヵ年政策計画事業のなかに、ＮＧＯとの協力による保育施設づくりと人材養成を打ち出しました。いずれも、成果は今後を待たなければなりません。

今年六月、東京で開かれたＣＹＲ特別座談会では、タイやカンボジアの村での、貧しさのなかとはいえ、豊かな自然と思いやりに包まれた子どもたちの生活環境が話題になりました。驚いたことに、先進国日本をまじえたこれら三ヵ国の実践報告が浮き彫りにしたのは、子どもの問題をわがことと考えない親が増えた日本で、育ちそこねている子どもたちの心の状態でした。アジアの村の生活には、日本の保育関係者がうらやむような、おとなと子どもとの一体感が残されています。日本でも子どもたちの育つ権利を、私たち自らの問題として考え、子どもたちの心の声にもっと敏感にならなければなりません。

参考資料 (References)

1. The World Bank. ASSESSING AID, What Works, What Doesn't, and How. Oxford University Press, 1998
2. Sen A. MORTALITY AS AN INDICATOR OF ECONOMIC SUCCESS AND FAILURE. The Economic Journal, 1998: 108; 1-25
3. The World Bank Resident Mission. THE WORLD BANK AND CAMBODIA. 1999
4. Ratnaike J. EARLY CHILDHOOD DEVELOPMENT SERVICES IN THE CONTEXT OF THE NATIONALGOALS OF SOCIAL JUSTICE AND EQUITY AND THE RIGHTS OF THE POOR CHILD. (Unpublished paper) 1999

On The Rights of the Child to Develop

Yukie SATO, CYR Director

It was at the leafy playground of the childcare centre. The children looked eagerly at the leaves, which they brought to lay on the ground, to compare with the one that the childcare worker held high in the air. The leaves in front of the children had much the same shape as the one in the woman's hand. "Is yours the same shape as this one?" She asked the children pointing at the leaves on the ground. "The same!, the same." Among the swarming cries of reply there was a voice calling out, "No." "What's the difference?" "Mine is worm eaten." "What kind of leaf is this?" "An ordinary one." The scene was from one of the villages in Cambodia, a few years ago, when the childcare worker was practicing to teach children aiming to develop their cognitive learning in shapes, imagined space/direction and in lateral thinking.

Cambodia, holding still its renewed memories of civil wars and conflicts, is one of the poorest states in the world. The majority of children, who are nearing the school age in the rural areas, were born to families of the poor, lacking food and everything else. Still, the primary school enrollment rate in Cambodia exceeds those of other poor countries in the region, such as Bangladesh, Pakistan and Nepal, all of which have been the subjects of foreign aid aimed at improving the condition of education. It is thanks to the concerted efforts made by the concerned Cambodians who wished to liquidate their own bitter history of denied education. Yet, the problems are mounting. The government statistics reveal the very low enrollment rates of primary education throughout the rural areas, added to the high ratio of the repeaters, which reached a level of 25% and about 30% of dropouts among 1st to 3rd graders during 1997-98. It is not only a waste of education costs, both at national and individual level, but also the worst sacrifice on the part of children. They have been denied the basic right to education due to poverty. They are often withdrawn from school because they contribute to the family's income. Or reluctant parents hesitate to send the young child to a school located so far that the child needs to walk several kilometres from their homes.

The government is now set to undergo a review of its rural development strategy to improve its long term economic and social stability in collaboration with the international community. But social inequality is intensified among the rural poor who send off from the villages the only able bodied men into the few jobs made available in urban areas. In the villages women and children are left behind insecure and poverty stricken. People in many villages lack not only food, but also clean water and have to cope with diseases of which the underlying cause is malnutrition. Furthermore, there are no public health services to depend on. An estimated infant mortality rate is 90-115 per 1000 live births. The rate is much higher than the regional average of 42 per 1000 live births.

The government's development plans for rehabilitation of the country gives priority to the public health and education sectors with emphasis on increasing facilities and training capacity. The Ministry of Education, Youths and Sports specifically emphasizes the importance of early childhood care. MoEYS has established a National Task force to develop a Master Plan for Early Childhood Development. The Ministry of Women and Veteran's Affairs announced also this March programmes to develop childcare facilities and training of personnel to be part of its five year planning policies as an urgent matter. The results are awaited.

In Tokyo this past June a symposium on how children adapt to changing society was organized by CYR. The highlight was the example of healthy development of needy children in rural areas in Thailand and Cambodia, where an abundance of nature and loving care of the adult community were still available. The reports from Japan when compared to these countries portrayed the surprising scenes of Japanese children no longer following a natural course. The cases of an increased number of parents who were unable to regard the problems of their children as their own were also reported.

Those children were seen drifting astray in their mental development and no longer able to reach their full potential. At the symposium some Japanese childcare workers admired the strong tie of families and communities in parts of Asia. We need to respect in Japan, too, children's rights to develop, and tune our mind's ear to listen to the voices of children speaking from the heart.

(Translation by the author)

染めの技術をカンボジアで生かす

カンボイ・トングナム（ピアップ）

CYRのプノンペン事務所で織物技術の指導をしている私は、染織技術、ことに植物染料の処理法に興味をもっていました。さいわい、今年六月、草木染めの糸や布処理について日本で学ぶ機会に恵まれました。まず、高崎市染料植物園では、マリーゴールドの花やコーヒーの葉を例に、絹糸の前処理法や媒染剤の効果的な使い方を学びました。東京の女子美術大学では、染料の混ぜ方、色落ちの防ぎ方、日本で行われている草木染めの話などを聞きました。今回の見学で得た染織の実践知識や助言は、カンボジアでの仕事の改善に生かせると思います。また、滞在中に参加した、カンボジア絹絣などの展示即売や、町で売られている布などを見て、日本で好まれる柄や色の傾向もわかりました。ご協力くださったみなさんに心から感謝します。

草木染めの実習（高崎市染料植物園）
Dyeing with natural dyes at Takasaki

Bringing Back Dyeing Skills to Cambodia

Khampoy TONGNAM (Pheap)

As an instructor of the weaving class at CYK Phnom Penh Office, I have always been interested in the art of dyeing, particularly dyeing with natural dyes and pre-treatment of yarns. Last June, I had an opportunity of learning how to prepare silk yarns and use mordant effectively at Takasaki City Dye Plant Botanical Garden. We used marigold flowers and coffee plant leaves. At Women's College of Fine Arts in Tokyo, I was given a lecture on how to mix natural dyes, how to fix dyes, and how natural dyes are being used in Japan. Practical knowledge, hints and advice on dyeing that were given to me will be most useful in improving the quality of our products in Cambodia. I also observed what colors and patterns are preferred by the Japanese people when I visited the CYR Exhibit of Fabrics and specialty shops in Tokyo. I would like to express my sincere thanks to all of you who helped with this visit.

子どもたちの明日
Children, Our Future No. 51

発行日 ■ Published
1999年9月5日 September 5, 1999
発行人 ■ Publisher
深水正勝 Masakatsu Fukamizu
編 集 ■ Editorial Director & Staff
峯村里香/野沢朋子 R. Minemura/ T. Nozawa
翻訳ボランティア ■ Translation Volunteers
大井幸子 Sachiko Ohi
落合雅貴 Masaaki Ochiai
印 刷 ■ Printing
（有）昭英社 Shoeisha
発 送 ■ Circulation
CYR ボランティア CYR Volunteers

定価 200円（会員は会費に含む） ¥200 (included in member fee)

CYRの活動をご支援ください　Please Join CYR

年会費 Membership Fee per year

正会員 Regular member	¥10,000	学生会員 Student member	¥3,000
賛助会員（団体）Supporting member (Organization/Corporation)			¥30,000
賛助会員（個人）Supporting member (Individual)	規定なし		Any amount

下記の口座に「入会」とご明記の上ご送金ください。
Please send the money to the following account;
郵便振替 口座番号 00110-8-36227
Postal Transfer: PO Acct. No.00110-8-36227
銀行振込 第一勧業銀行広尾支店 普通 1280817
Bank Transfer: Daiichikangyo Bank Hiroo Branch Savings Acct. No. 1280817

幼い難民を考える会は、難民になったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。1992年までタイの難民キャンプで保育センターを運営してきました。現在はタイとカンボジアの農村で、子どもたちが健やかに育つことのできる場所づくりをめざして、主に村の保育所を中心に、子どもと女性を対象とした活動を続けています。

CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

東京事務局 〒152-0034 東京都目黒区緑が丘1-18-20
☎ 03-3724-7525 FAX 03-3717-3313
e-mail: cyr@mtb.biglobe.ne.jp

Head Office :1-18-20, Midorigaoka, Meguro-ku, Tokyo 152-0034, Japan
Aranyaprathet :3-8 Khang Wat Luang, Aranyaprathet, Srakeaw 27120, Thailand ☎ +66-37-231-344
Phnom Penh :No.98 St.432 Sangkat Toul Tumpoung II, Khan Chamkar Mon, Phnom Penh, Cambodia ☎ +855-23-210849